

編集後記

本号は平成最後の発刊となるが、多くの会員の皆さまの論文を掲載できたこと、心から皆様に感謝申し上げたい。平成はどのような時代であったかと思い起こすと自然との共生のあり方を求められた時代であったように感じる。3月某日、私は「金子みすず記念館」を訪れる機会を得た。金子みすずと聞いて、彼女のどのような詩を思い浮かべるだろうか。小学校の教科書にも掲載されている、「わたしと小鳥と鈴と」だろうか。「みんなちがって、みんないい」というフレーズをご存知の方も多いことと思う。私はこの度の機会で「大漁」という詩に非常に心を惹かれた。以下がその詩である。

大漁

朝焼け小焼けだ、大漁だ
大羽鱈（おおばいわし）の大漁だ。

浜は祭りのようだけど、
海の中では 何万の、
鱈（いわし）のとむらいするだろう

金子みすずの詩は、「自然と共に生き、小さな命を慈しむ思い、命なきものへの優しいまなざしが、金子みすずの詩集の原点」といわれている。

私たちの日々の暮らしは、ともすれば自分の生活の利益に通じればよいという思いを抱きがちである。しかし、「自己利益の追求」という価値は、重要なものを見落としてしまう危険性を孕むのである。自分とは異なる他者の思いに関心を寄せることができる、多面的な視点・視角を持つことが重要であることをあらためて教えられた。

「平成」から「令和」へと時代が変化するなかにあって、私たち市民に託されていることは、いま一度、これまでの私たちの社会を振り返り、次代につなげる責任を明らかにすることなのではないだろうか。元号が変わる！オリンピックがある！などに惑わされることなく、私たちが暮らす社会がどのようにあるべきかを考えることのできる新たな時代をむかえたいものである。

編集委員会

大友芳恵、鎌田禎子、内ヶ島伸也、近藤尚也

北海道医療大学看護福祉学部学会誌 第15巻 1号

2019年3月31日発行

発行者 平 典子

発行所 北海道医療大学看護福祉学部学会

編集担当 大友 芳恵、鎌田 禎子、内ヶ島伸也、近藤 尚也

印刷所 コミナミ印刷(株)
